

荷風文学の知的背景

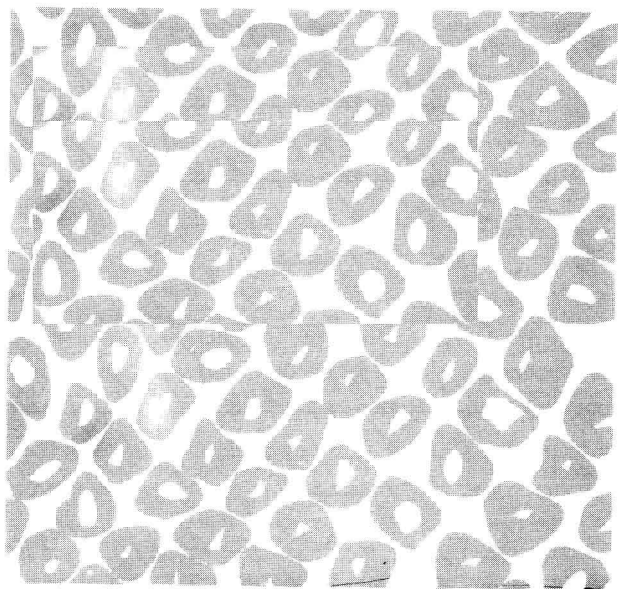
高橋俊夫著



笠間書院刊

荷風文学の知的背景

高橋俊夫著



笠間書院刊

高橋 俊夫（たかはし としお）

昭和6年東京に生れる。

開成中学を経て早稲田大学文学部卒，
法政大学大学院博士課程修了。

専攻 日本近世文学及び永井荷風。

著書 『西鶴論考』の他 西鶴・荷風関係の論文多数。

日本近世文学会・日本文学風土学会各会員

日本文学研究會常任委員。

荷風先生を偲ぶ会会員。

現住所 〒275 習志野市袖が浦団地337-502

笠間選書30 荷風文学の知的背景

昭和50年1月30日初版第1刷発行

定価 1000円

—検印省略—

著者 高橋俊夫◎

発行者 池田猛雄

印刷 大文社印刷所

製本 笠間製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町1-46

電話03-294-0787・0996 振替東京1-56002

書籍コード 1391-953030-0924

『荷風文学の知的背景』目次

第一章 荷風文学の知的背景——「荷風日記読書記事索引」緒言—— 1

一、荷風の録音盤……………	3	十三、文人たち……………	63
二、私の「お雪」……………	4	十四、成島柳北……………	69
三、知的な荷風……………	7	十五、白楽天・紅樓夢・蘇東坡……………	77
四、自由な荷風……………	9	十六、知性の文学……………	86
五、荷風と漢籍……………	10	十七、荷風と西鶴……………	87
六、為永春水……………	13	十八、「雨瀟瀟」の芸文……………	93
七、荷風と芭蕉……………	22	——也有三次回・レニエー……………	
八、「来訪者」の詩情……………	35	十九、大田南畝……………	98
九、浮世絵と外骨……………	40	二十、元八まん……………	106
十、ハーン・ロチ・モーパッサン……………	45	二十一、葛飾住み……………	115
十一、荷風とジード……………	53	二十二、同時代の作家たち……………	133
十二、「深川の唄」……………	57	二十三、儒者たちの著作……………	140
		二十四、松崎慊堂……………	147

第二章 永井荷風日記読書記事索引	153
------------------	-----

附錄一 改訂 增補 戦後荷風研究文献目録	196
----------------------	-----

附錄二 永井荷風年譜略	243
-------------	-----

編後贅言	
------	--

第一章 荷風文学の知的背景

——「荷風日記読書記事索引」緒言——

斗米尋常役癩身
鷺花海裡寒盟客

病來還喜暫離塵
朱墨堆中失意人

柏木如亭『木工集』

一、荷風の録音盤

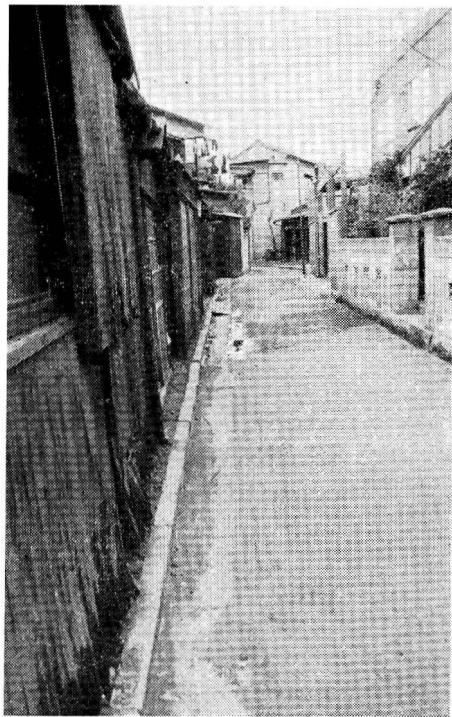
過日、畏友近藤富枝女史（『荷風文がたみ』『文壇資料本郷菊富士ホテル』等の著あり、エッセイスト）の斡旋を得て、NHK放送文化センターに荷風生前の録音盤を聴く機会があった。すなわち、昭和二七年、その文化勲章受賞の年、歳晚廿六日、八百善で録音せられた嶋中鵬二氏との対談「荷風よもやま話」及び自作朗読「断腸亭日乗」の二枚である。前者は昭和二八年一月六日に放送せられたが（同月廿四日再放送）、後者は放送の機会が無かった。時に荷風七三歳、その若々しい滋味深く明晰な声音と、楽しげで心を開いた語り口に一驚を喫したのであったが、最も印象深く感銘せられたのは、嶋中氏が外出以外の時、何をして居られるかと問うたのに対し、専ら西洋の小説を読んでいるという答えが返って来て、更にアラゴンやサルトルの名が飛び出して来た事であった。しかも、アラゴンの“Les communistes”という大変厚いものを今、読んでいるという話しに到って、私の驚きは最高潮に達した。『レ・COMMUNISTE』はこの録音の行われた年を遡ること僅か三年前の一九四九年から書き始められた連作小説の一つであった。もっとも、『断腸亭日乗』の昭和二八年一月十七日には同じくアラゴンの“Les cloches de Bale”（バールの鐘）の読書記録があり、又、同年三月十三日にも“Les voyageurs de l'impériale”（馬車屋上の客）のそれが見られるのであるから、『断腸亭日乗』を三読四読している私にとって、今更、驚く必要は無かった訳であるけれども、荷風自身の肉声に依って是を聞いた時、それは一種、異様な感銘を

伴って私を衝いたのである。若年の頃、西土の文物に心酔し、熟するに到って東洋（日本）への回帰を示す者が多いとはよく云われる事である。然るに荷風は違うようだ、是はどうした事である。フランス留学時代への懐古の情の為せる業か、いや、それならばモーパッサンやゾラやレニエーで足りるのではないか、アラゴンとなると、しかも『レ・コミュニスト』となると、話しは少しく違って来るのではないか、近藤女史と訣れた後、私は荷風が晩年、連日の如く杖を曳いた浅草に到り、独り盃を傾けつつ、次々と湧いて来る想念に身を任せて居たのである。

二、私のお雪

開成中学の学生であった頃から荷風は私の枕頭の書であった。偶々、荷風が慶応義塾の教授時代に教え子であった小沢愛閔氏から英語を教えられたことと、荷風晩年の仮寓から程遠からぬ処で私が成長したこと等が直接の契機ではあったが、何よりも其の文章と風懐に魅せられたのであった。それは音楽の如く私を捉えたのである。余計な理屈は一切不要なのであった。病いは高じて、長身の荷風が下駄ばきに買物籠を提げ市川の駅前の鰻屋に入るのを尾行したりした。今もこの鰻屋は殆ど其儘に残されてある。「冷笑」中の一人物吉野紅雨の名を藉りて「紅雨日乗」と題した文章体の日録をつけ始めたのも其頃であった。とにかく、荷風を読むことは、私にとって、冗漫で猥雑な「現実」というものとは別乾坤の、明晰で豊饒な新しい現実を創り、その中で充実した「生」を生きる存在の様態であった。人は屢々それを逃避と呼ぶ。然し、それがどうしたと

いうのだ。中学への往復に省線電車の車窓から見る隅田川は、相貌を変えて別の美しい「すみだ川」が私の目に映って居る。現実の変身を司る司祭、それがナガイ・カフーであった。木村荘八挿画の『遷東綺譚』に到って、私は私の玉の井と、私のお雪を求めたいという気持を抑えられなくなった。私は私のお雪の現前をこの目で確かめたかった。岩波文庫版の『遷東綺譚』（昭和廿二年初版）を携え、充分に地理的検討を重ねた私は、或る年の春、東武電車の玉の井駅に降りた。迷路の中は既に荷風世界の「遷東」に変身して居た。そして、——私のお雪はいたのだ



「お雪」のいた安藤方あたり（近藤邦男氏撮影）

る。お雪は優しく私を迎えた。「仕度していてね。こわがらなくてもいいわ。お母さんに抱かれています。積りでいらっしゃい。」そう言つて下へ降りて行つた。茶お茶を持つてお雪が再び上つて来た時、お雪は其の名の通り純白の chemise 一ひだだった。お雪は、「彼方あちらを向いていらっしゃい。」と言つて私を床の中へ入れた。叶えられる筈の無い宿願が、今達せられようとして居た。私はお雪の脱いだ白い drawers を思はず胸に抱いて、「ぼくのお雪」と小さく言つた。私の目からは何か涙が流れて居た。「いめんね。」私は私のお雪にそう言つた。そして、遙か遠い処へ私は運ばれて行つた——。気が付くと、お雪の姿はもうそこには無かつた。染みだらけの娼家の壁を春の斜陽が、ものうく浮かび出させて居る。私は蒼惶として其の場を去つた。迷路はもう、只の汚れた小路に過ぎなかつた。——私は二度と、私のお雪に逢わなかつた。その反対に、私の中のお雪は日が経つにつれて益々美しさを増して行つた。私は『濠東綺譚』という非現実の時間の中で、非現実のお雪に童貞を献げたのであつた。それは私の聖婚であつた。そして、その聖儀の司祭者がナガイ・カフーであることを私はひそかな誇りとした。現実のどんな女よりも『濠東綺譚』のお雪が美しかつた。そして本当に美しいものは非現実の中にしか無いのだから、私には恋愛も結婚も考えられなかつた。私のお雪との陰微な性のまさぐり合い、私はオナニストに成る他は無かつた。それは現実への断念を意味していた。こうして、孤独と、稍過度の自瀆の中で、青白い顔をした私は、学校の中で益々運動性を喪い繊弱な網を自己の周囲に張り廻して、独り自我の世界に閉じ籠つた。しかし、一方で私はこの孤独地獄からの脱出の道を恋愛と社会運動との中

に夢み始めてもいたのである。荷風のもう一つの、「反抗」という因子がその後の私を支えた。荷風の文学は最も本質的な意味での近代日本への批判者として私の前に顕れて来た。反レッドパージ闘争の大波が襲いかかって来ていた。私は早稲田大学の一年生であった。同人雑誌に「抵抗の伝統——永井荷風」を書いた。

三、知的な荷風

私が中学時代に文学辞典のように机辺に置いていた書物に杉山平助著『文芸五十年史』というのがある。勿論、戦時中の出版で奥付には出版会承認という文字とその番号が記されてある。鱒書房発行で昭和十八年十月十日発行の三刷である。この永井荷風の項目を今開いて見ると、「老成の作家荷風は、耽美主義を主張し実行しながら主情的に溺れない主知主義者の面目が鮮明である。近代的知性において荷風におよばず、官能と感覚の豊かさにおいて彼を瞠若たらしめたのは谷崎潤一郎である」という部分に赤鉛筆の傍線が引かれてある。私は荷風の鋭利繊細の感覚に魅かれる反面、一方で主知的側面にも漸く目ざめていたかの如くである。私は荷風の教養の源泉、その知的背景に長らく想いを到して来た。

明治・大正・昭和の三代に亘って文苑に独自の巨歩を印した荷風の業績は死後益々その光芒を鮮明にして居る。荷風は豊醇な感覚と鋭利な批評精神とに恵まれていたが、亦同時に一代の教養人でもあった。和漢洋を被うその博く深い学殖は露伴・鷗外・漱石らのそれと共に近代日本の最

高水準を示している。そして、それは一見、怠惰と放縱の中に自己を韜晦しつつ、実は孜孜として懈むことなき研鑽の賜物であった。「およそ人の子たるもの、其父死するの後其の家を守らず其蔵書を市に鬻ぐは罪の甚軽からざるものなり。余抽斎の伝を読み蕩子の行状に及ぶや自ら省みて差悔禁ずべからざるものあり。森先生は榮枯窮達任天命。安樂換錢不患貧の一詩により篤学の生涯を抽斎に比せられたり。然れば余は遊惰廢懶の身を以て其の蕩子に比するの当に然るべきを思ふ。」（「隠居のごこと」）などという荷風の言葉を額面通り受け取ってはなるまい。正に荷風一流の反語なのである。論より証拠、荷風は一方で「人一度轆轤不遇孤独寂寥の悲境に沈むや、わづかに慰むことを得るもの唯書冊のみ」（『断腸亭雜藁』所収「曝書」）と云い、又、「半夜寒燈の下、ひとり満腔の愁思を排せむとする時、人は唯案頭に一卷の書、炉辺に一壺の酒あるの外、亦他に求むるものなきを知るべし」（『革斎漫筆』）と言っているではないか。その最も歴然たる証跡は是を『断腸亭日乗』に見ることが出来る。言う迄も無く、大正六年から書き続けられ、関東大震災、今次の大戦、罹災に依る流寓を挟んで一日の欠落も無く昭和三四年四月二九日、すなわち逝去の前日まで筆を執った全四十三巻の歴大な日記である。この日乗は多くの、和漢洋に亘る読書の記録を含んでいる。私がこの読書記録の索引の作製を思いついたのは、一昨年、急性脾臓炎に冒され入院中の病牀に於てであった。以来、日乗を復読しつつその読書記事をカードにとる作業が続けたのである。それは約六〇〇〇枚、三千項目に上ったが、この間、荷風の教養の源泉が逐一明らかに becoming 行く思いがした。又、荷風の一々の作品活動と、同時期の読書とを関連づけて考え

る楽しみもあった。然し浅学菲才の私には手に余る難読未見の著者名や書名が頻出し、呉下の旧阿蒙たるの歎きを幾度も味わわねばならなかった。『国書総目録』『名人忌辰録』『日本随筆索引』『伝記資料索引』『人物文献索引』『東京掃菴録』『事実文編』『森銑三著作集別巻索引』等々の文献はもとより、各地方の人物志の類にも目を曝し、国会図書館等にも屢々足を運んだ。それは、日々の雑駁なる勤務で、ともすれば固化しようとする私の心情を救ってくれる楽しい日々でもあった。更に伴いなことは荷風周辺の人物については竹下英一氏の、又、江戸期の著作については丸山季夫氏の示教を仰ぐことが出来たことである。竹下氏は荷風周辺にあった人で、小山内薫門下の劇作家であり、『岡鬼太郎伝』という名著があることはよく知られている。丸山氏は現在、再刻上梓中の『日本随筆大成』全巻の解題を担当せられている書誌研究の権威である。上田秋成の春雨物語完本の発見者の名譽は氏に帰すべきものである。私ごとき一知半解の徒が辛うじて索引作製を曲りなりにも一応完成させ得たのは両氏の芳情の与って大なるものがあったことをここに言って置かねばならない。

四、自由な荷風

関東大震災の折りの朝鮮人虐殺について「平生おのづから天命をまつ心ありしが故にや、ことしの秋の大地震にも無~~幸~~、韓人を殺して見~~ん~~なぞの、惡念を起さず」（『桑中喜語』、傍点引用者）と実相を看破して痛烈なる皮肉を吐き、虎の門事件の難波大助の死刑については、「都下の新聞紙

一斉に大書して難波大助死刑のことを報ず。大助は客歳虎の門にて摂政の宮を狙撃せんとして捕へられたる書生なり。大逆極悪の罪人なりと惡むものもあれど、さして惡むにも及ばず、又驚くにも当らざるべし。皇帝を弑するもの歐洲にてはめづらしからず。現代日本人の生活は大小となぐ歐洲文明皮相の模倣にあらざるはなし。大助が犯罪も亦模倣の一端のみ。洋装婦人のダンスと何の扱ふところかあらんや」『斷腸亭日乗』大正十三年十一月十六日と、天皇制禁忌に呪縛されぬ自由な発想の出来た荷風という存在は実に明治以後の文学史に於て空前のそれであつたのではないか。その知性の構造は未だ如何程も究められてはいないように思われる。そして、あの独自の作品群との内的関連についても事は同じである。私は今、荷風日記読書記事索引の稿を改めて見直し乍ら、如上の課題について思いを馳せるのであるが、そこに現れる龐大な書目を少しづつ読破しつつ悠然と自由人荷風の本質に迫ることを試み続けたい。以下は總て大成を宿願とする本格的な永井荷風研究への散策的序章であるに過ぎない。正直を云えば、索引のみでは一書の体裁を為し得ざるが故の自由気儘な荷風庭園の逍遙である。

五、荷風と漢籍

話は矢張『瀝東綺譚』からという事になる。篇中の主人公を大江匡先生という。先生、北廓の裏街の古本屋からの帰途、巡查から不審訪問を受ける。「名は何と云ふ」との質に、先生「大江匡」と答え、その浅学鄙陋を哀んで「匡はタダスハコに王の字をかきます。一たび天下ヲ匡スと論語にあ

る字です。」と注解を加える。巡査の、是を解しなかったこと、続く行文、「巡査はだまれと言はぬばかり、わたくしの顔を睨み、手を伸していきなりわたくしの外套の釦をはづし」というのから明らかであろう。言うまでも無く大江先生は、巡査の、これを解せざることを知って是を云っている。ここに先生の孤独と、そして優越がある。この挿話は大江先生の漢学的教養を持つ人であることを端的に象徴している。『断腸亭日乗』に見える漢籍の類には次の如きがある。

淮南子／袁子才「随園詩話」・「随園文粹」・「新斎譜」／王次回「疑雨集」／韓偓「迷楼記」
／韓非子／瞿佑「剪燈新話」／孝経／洪自誠「菜根譚」／史記／詩経／荀子／商子／莊子／
戦国策／蘇東坡／趙翼「甌北詩話」／陶淵明／杜甫／杜牧／墨子／孟子／文選／俞曲園「東
瀛詩選」／李漁「閒情偶寄」／陸放翁／李商隱「義山雜纂」／李息齋「竹譜詳錄」／李嶺
「剪燈余話」／列子／老子／論語／唐人說薈／宣和遺事／陳扶搖「秘伝花鏡」

そして児島献吉郎の『支那散文考』を大正九年から十二年にかけて読み、終戦の年の三月にも再読している。空襲の危険も迫った昭和十九年に、「返す／＼猪武者輩の我武者等政治を憎まずんばあらず」（日乗・昭十九・一・二六）と憤懣を吐き乍ら、荷風は「論語」や「孟子」を読んでいた。思えば明治廿二年十歳の折りに、小学校の帰途小石川金剛寺坂上に住む某学者宅に寄り「大學」「中庸」の素読を受け、十二歳では一ツ橋の中学校で会津の藩儒南摩羽峯の『論語』講義を聴き、十七歳で岩溪蓑川に入門、『三体詩』の講筵に列し漢詩作法を学んで以来、生涯を通じて漢学的教養の蓄積が続けられたのである。言うまでも無く荷風の外祖父鷺津毅堂は「三礼を以て

世に著はれた学者」(秋庭太郎著『考証永井荷風』)であり亦優れた漢詩人であった。三島中洲撰文の碑銘には毅堂去って「斯文將墮地」とある。荷風はその著『薄遊吟草』『毅堂集』『親燈余影』を親しく翻したこと『断腸亭日乗』に明らかであるが、その勉強の跡は『下谷叢話』に徴することが出る。父久一郎はその門人であり禾原と号し是亦『来青閣集』十巻を遺した漢詩人である。

本来色濃く流れていた漢学的教養の血脈を荷風は孜々として育て続けたのである。かくて『墨東綺譚』の大江匡先生(永井家の本姓はもと大江である。)の論語の挿話は、その片鱗が不図きらめいたものであることが判る。荷風自身、その「小説作法」に於て「わが日本の文化は今も昔も先進大国の模倣によりて成れるものなり江戸時代の師範は支那なり明治大正の世の師とする所は西洋なり。然れば漢文欧文そのいづれかを知らざれば世に立難し。」と言ひ、「此国の小説家漢文を無視しては損なり」と説いている。一見、人情本めかした『墨東綺譚』の文章に漢文脈の雄勁な文体が息づき、それが悲痛寂寞の情に見事に調和して、孤愁の心情の浸み出すのに人は気付くであらう。当初「玉の井雙紙」と人情本風の標題であつたのが『墨東綺譚』と漢語調の堅い標題に替えられたのも(「作後贅言」)この辺の事情と繋るのであらう。

扱、巡査の権力なくして、しかも同程度の鄙陋の徒たる私は改めて『論語』を翻さざるを得ない。その憲問篇に曰く。

「子貢曰、管仲非仁者与、桓公殺公子糾、不能死。又相之。子曰、管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下。民到于今受其賜。微管仲、吾其被髮左衽矣。豈若匹夫匹婦為諒也、自經於溝瀆、而